



TITLE:

倉敷通信

AUTHOR(S):

CITATION:

倉敷通信. 天界 1933, 13(150): 410-410

ISSUE DATE:

1933-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165420>

RIGHT:

倉 敷 通 信

七月と八月とは、學校休暇のためも手傳つて、多くの會員に會ふ機會が與へられ、毎年のことながら、感謝したのであつた。

七月1日夜は例會であつたが、岡山の深井渙二氏が多勢引率して來られ、同氏は間もなく入會された。深井氏は語學の力を持つ科學の愛好者で、將來の活動に注目される。

8日夜は土井一人君が來訪されたが、時間が少くて充分の會談が出來なかつたのは残念。次回は宿泊のつもりで來られる筈。宇野であるから便利が悪い。

22日には廣島高師の森下功君が近畿地方の山を巡つて歸途立寄られた。涼しい山から熱暑の世に出られた同君と、或ところ(決して怪しくはないデス)で午餐を共にし、大原美術館と新溪園とに遊んだ、この日は暑かつた。

24日夜は岡山の永瀬哲夫君である。射手座の星霧や星團を32種でしきりに搜した。いくらでもある。

31日午前大阪府豊中學校の五十川一郎君の來訪を受けた。鳥取縣に向はれるところであつた。同君は一年級の時から會員である由で、望遠鏡の説明に勞はない。

31日午後和歌山縣の小横流星課長と會つた。郷里津山への御歸途を足をのばして下さつたわけで、水蜜桃をかぢりながら痛談した。『あまりしやべり過ぎた感がある』のそのままであつた。

倉敷の藤原吉衛君には度々會ふ。八月5日の例會の夜はおそくなつた。同君は夜來訪される時には必ず學校が當直に決つてゐる。校長がモダンな人で、漱石の『坊ちゃん』の中學校の校長先生とは比べものにならない。

7日夜は岡山の永瀬君と會つた。

9日には豫定の通り大阪府池田の笹部榮一君が遠方から來られた。熱心な觀測家である話はいくらでもあつた。同君が倉敷で困つたのは蚊ではなくて言葉のアクセントだつたさうである。同夜は旅館に入られたが、夜半まで起きてゐて『倉敷語』の實地教授を受けられた由。翌日は美術館を參觀されたが、泰西名畫から觀測上のヒントを得たと喜ばれ、私は恐縮したことであつた。

10日夜は岡山の中藤晴義君が中學生五名を引率され兄貴顔で來訪された。久しぶりに晴夜の快味を満喫した。

15日には尾道(花山天文臺の住人)の宮本正太郎君と廣島の大橋登潮君とが來られた美術館に案内したところ、『くれるとなればあれにする』などと勝手な熱を上げたものである。大橋君は私の姿を活動寫眞に収められた。

23日から岡山で講習が開かれた。同夜水野副會長は京都の山本忠治君をはじめ、岡山の高木忠平、矢吹一、高田正の三君などを率ゐて來觀された。空は少し悪かつた。矢吹君は風景寫眞の専門家でその方面の議論をした。高田君は高倍率の接眼レンズをつけては星像を焦點の内外でしきりに檢べられた。それを私がひやかしたものである。

倉敷の三好淳七郎君には實に度々會ふ、新しい喜びや悲しみを共にしてゐる。亡くなられた長谷秋男君は三好君と親しかつた。

會員の來訪者は年と共に多くなるが、もつと多くなつてほしいものである。諸君に參考になるものが私の手許にあることを申し上げておく。(8月30日記) (荒木健兒)